

は

は(蕪)《名》

一一⑦葛のはのいかてかあらぬかたに返りし 蕪

はいしょ(配所)《名》

二二⑩讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて

はか(墓)《名》

二二①人にたづねれば梶原が墓となむこたふ

はかせ(博士)《名》

九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり

はかなし(果無)《形》

一①困 三①漕行舟のあとのしら波誠にはかなく心ぼそし

五⑭はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ

一①き困 一八⑭かたみさへあとなくなりけるこそはかなき
世のならひ

はかる(計)《動四》

一①ら困 三③⑧はからざるにとみの事ありて都へかへるべき
になりぬ

はくい(白衣)《名》

二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて

はぐくむ(育)《動四》

一①み困 二②⑩此召公の跡を追て人をはぐくみ物を憐むあま

ばくじうじん(縛戎人)《名》

二七⑧かの縛戎人の夜半の旅ねもかくやありけむと
おぼゆ

はくてう(白鳥)《名》

九③尊は白鳥となりて去給ふ

はくらくてん(白楽天)《名》

一③彼白楽天の身は浮雲に似たり首は霜ににたり

はげし(激)《形》

一①しく困 一六⑧川ふかく流れはげしくみゆ

一八③北は深山にて松杉嵐はげしく南は野山にて秋
の花露しげし

二九②太山おろしはげしくうちしぐれて

三三③峯のあらしのみぞいとゞはげしくなりまされ

一①しき困 二⑦嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける

二四⑦冲津風はげしきにつちよする波もひまなけれ

はこね(箱根)《名》

二八⑧箱根の湖となづく又蘆の海といふもあり

はこねのやま(箱根山)《名》

二八⑥管根の山にもつきにけり

はざま(狭間)《名》

二四⑦あら磯の岩のはざまを行過るほどに

はし(橋)《名》

一四⑦みつうみにわたせる橋を浜名となづく

cf. はまなのー

はじまる (始) (動四)

ーり 圃 八④八雲たつといへる大和言葉も是よりはじまり

けり

はじむ (始) (動下二)

ーめ 圃 一二③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたる

まで

三一⑥楼台の莊嚴よりはじめて林地のありとにいた

るまで

はじめ (始) (名)

四③袂にかゝるはしめ成覧 圃

八④はじめは出雲国に宮造ありけり

二〇⑧発心のはじめを尋きげば

三〇⑩抑かまくらのはじめを申せば

はしもと (橋本) (名)

一四②橋本と云所に行つきぬれば

はしもとのしゆく (橋本宿) (名)

一七⑥名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる

はしら (柱) (名)

一八⑩ある家の柱にかゝれたりけり

はせのぼる (馳上) (動四)

ーり 圃 二二⑨都のかたへはせのぼりけるほどに

はちぐわつ (八月) (名) → はづき

はちぐわつとをかあまり (八月十日余) → はづきとをかあまり

はちぢゅう (八丈) (名)

三一⑦此阿弥陀は八丈の御長なれば

はつ (果) (動下二)

ーて 圃 一一⑦別路に茂りもはてゝ葛のはのかてかあらぬ

かたに返りし 圃

cf. こえー・しげりー・すみー・よはりー

はつえ (末枝) (名)

三〇⑩御門の九の世のはつえをたけき人にうけたり

はつかあまり (二十日余) (名)

cf. かんなづきのー

はづき (八月) (名)

三一③職掌に仰て八月の放生会ををこなはる

はづきとをかあまり (八月十日余) (名)

一⑨仁治三年の秋八月十日あまりの比

はづる (外) (動下二)

ーれ 圃 二七②一葉の舟中万里身とつくれるに彼も是もはづ

れず

はて (果) (名)

一九⑤此里のひがしのはてにすこしうちのぼる

はな (花) (名)

八④人にかたらんとよめる花のかたみには

八⑤花ならぬ色香もしらぬ市人の 圃

一〇⑩花ゆへにおちし涙のかたみや 圃

一六③あかの花も露鮮なり

はなる (離) (動下二)
cf. おもひ

はふもん (法文) (名) ↓ ほうもん
はふわう (法皇) (名)

cf. さぬきのほうわう
はべり (侍) (動・補助動ラ変)

—ら困 二〇⑩さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ
—り困 一六①心のうちに申置て侍りけり
—れ困 二四①海に向ひたる家によどりて侍れば

はま (浜) (名)
cf. うちのの

はまぢ (浜路) (名)
九⑩この宮をたち出浜路におもむくほど

はまな (浜名) (名)
一四⑦みづうみにわたせる橋を浜名となづく

はまなのはし (浜名橋) (名)
一四⑩わきて浜名の橋そ過うき 國

はやし (早) (形)
—き困 一七①此河のはやし流も世中の人の心のたくひとは

はち (原) (名)
見す 國

一五⑩ 此原に木像の観音おはします
二六⑦原には塩屋の煙たえたく立わたりて

はる (春) (名)
二六⑧此原昔は海の上にかびて
二六⑬やがて此原につきて千本の松原といふ所あり
二二③年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいで
られて

はるかなり (遥) (形動)
—に困 三⑨湖はるかにあらはれて
四④しの原と云所をみれば西東へ遙にながき堤あり

一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれり

一五⑤北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し

はるばる (遙遙) (副)
二六⑭松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし

一⑩はるぐ遠き旅なれども

はるばると (遙遙) (副)
一九⑥遙々とひろき河原の中に一すぢならず流わか
れたる川瀬ども

二六②西東へはるぐとながき沼あり

はんじゃう (繁昌) (名)
三〇⑭今繁昌の地となれり

はんせふよ (班婕妤) (名)
六⑦班婕妤が団雪の扇秋風にかくて暫忘れぬれば

はんでん (半天) (名)

三三 鳥瑟たかくあらはれて半天の雲にいり

ひ

ひ (日) (名)

八 けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる

九 古郷は日をへて遠くなるみかた 歌

二九 此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた

三一 鳳の晝日にかぐやき覺の鐘霜にひゞき

三二 三日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき

ひ (火) (名)

一八 其家を尋るに火のためにやけて

二三 漁舟の火のかげは寒くして浪を焼

ひえいざん (比叡山) (名)

三 かの満誓沙弥が比叡山にて此海を望つゝよめ

りけん

ひかげ (日影) (名)

六 日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼそし

ひがし (東) (名)

一九 ⑤ ひがしのはてにすこしうちのぼるやうなる

cf. ひんがし —

ひがしじゆく (東宿) (名)

八 ① かやつ東宿の前を過ればそこの人あつま

りて

ひがしやま (東山) (名)

二 東山の辺なる住家を出て相坂の関うち過るは

どに

ひかず (日数) (名)

一 ⑩ 終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

ひかり (光) (名)

一九 ⑩ 日数ふる旅のあはれは大井河 歌

三二 ③ 白毫あらたにみがきて満月の光りをかぐやか

す

ひきかふ (引替) (動下二)

一 へ ⑦ 都にはいつしか引かへたるこゝちす

ひきわたる (引渡) (動四)

一 ⑦ ⑧ 駒引わたる望月の比も漸近き空なれば

ひく (引) (動四)

一 け ② 西東へはるくとながき沼あり布をひけるが

ごとし

ひく (弾) (動四)

一 き ⑥ 常に琵琶をひきて心をすまし

ひさし (底) (名)

cf. いた —

ひたす (浸) (動四)

一 さ ⑥ 南山の影をひたさねども青くして濕漑たり

一 し ③ 山のみどり影を浸して空も水もひとつ也

一 す ⑩ 影ひたす沼のえにふしのねの煙も雲も浮晴

がはら 歌

ひぢよ (美女) (名)

二五 ⑩ 白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と

ひと (人) (名)

一 ⑭ わすれず忍ぶ人もあらば

二 ⑧ ある人の云蟬丸は延喜第四の宮にておはしける

四 ⑫ 行人もとまらぬ里となりしより 歌

八 ① 東宿の前を過ればそこの人あつまりて

八 ④ かのみてのみや人にかたらんとよめる花のか

たみには

八 ⑬ ある人のいはく此宮は素盞鳥尊なり

九 ⑨ 思ひ出のなくてや人のかへらまし 歌

一一 ④ 人の発心する道その縁一にあらねども

一二 ④ あまねく又人の患をことわり

一一 ⑩ 此召公の跡を追て人をはぐくみ物を憐むあま

一三 ② 猶その陰を人やたのまん 歌

一三 ⑤ その宿は人の家居をさへ外にのみうつすなど

一三 ⑩ いかなる人のわたりそめけん 歌

一四 ⑥ 行人心をいたましめ

一六 ② 人多くまいるなんぞいふなる

一六 ⑫ 人の心にくらぶれば

一七 ② 人の心のたくひとは見す 歌

一八 ⑨ 聞えし人の罪ありて東へくだられけるに

二〇 ⑬ ある人のをしへにつきて

二二 ① 人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ

二二 ⑥ かたはらに人なくぞみえける

二三 ⑫ 清見かた関とはしちて行人も 歌

三〇 ⑪ 九の世のはつえをたけき人にうけたり

三一 ⑬ 大仏をつくり奉るよしかたる人あり

三一 ⑭ 本は遠江の国の人定光上人といふものあり

ひとすぢ (一筋) (名)

一九 ⑥ 河原の中に一すぢならず流わかれたる川瀬と

も

ひとつ (一) (名)

四 ⑥ 波の色もひとつになり

一〇 ③ 波も空もひとつにて

一一 ④ 人の発心する道その縁一にあらねども

一二 ② ひとつの甘菜のもとをしめて政をこなふ時

二六 ③ 山のみどり影を浸して空も水もひとつ也

三〇 ⑦ ひとつなかめの沖のつり舟 歌

ひとつら (一行) (名)

三三 ④ 一行の雁がね空に消ゆくも哀なり

ひととせ (一年) (名)

一五 ⑬ 一とせ望むことありて鎌倉へくだる

ひとなみなり (人並) (形動)

一 ⑦ 人並に世にふる道になんつらなれり

ひとひ (一日) 《名》

一七③爰に宿かりて一日二日とどまりたるほど

ひとまじ (副)

二二⑧ひとまじものびんとやおもひけむ

ひとむら (一村) 《名》

一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり

ひとよ (一夜) 《名》

一四⑫さても此宿に一夜とまりたりしやどあり

ひとり (独) 《名》

二〇⑦わづかなる草の庵のうちに独の僧あり

ひは (琵琶) 《名》

二⑥常は琵琶をひきて心をすまし

ひびき (響) 《名》

一四⑤松のひびき波のをといづれときゝわきがたし

三二⑨風とこしなへに金響のひびきをさそふ

ひびきわたる (響渡) 《動四》

一り囀 一九⑬風冷しく梢にひびきわたりにて

ひびく (響) 《動四》

一き囀 三二⑥亮の鐘霜にひびき

一く囀 八①里もひびくばかりにのゝしりあへり

ひま (隙・暇) 《名》

一四⑫ところゝまばらなるひまより

二四⑦うちよする波もひまなければ

二九⑩見とゞむるひまもなくて

ひも (紐) 《名》

一六④計帳の紐に結びつけたれば

びやくがう (白毫) 《名》

三三③白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞやか

ひらく (開) 《動四》

一き囀 三二⑧道場のあらたなるをひらきしより

ひろし (広) 《形》

一く囀 二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたゝへり

一き囀

一九⑥遙々とひろき河原の中に一すぢならず流わかれたる川瀬

ひん (鬢) 《名》

一①鬢の霜漸冷しといへども

ひんがし (東) 《名》

一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれ

cf. ひがし

ひんばん (蘋蘩) 《名》

三二①蘋蘩のそなへかくることなし

ふ (麿) 《名》

三二⑤鳳の臺日にかゞやき鼻の鐘霜にひびき

ふ (終) 《動下二》

一八囀 一〇⑩十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

五①いさたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老や
しぬると 歌

七①萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも

九⑭古郷は目をへて遠くなるみかた

二①⑨おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに

一⑦人並に世にふる道になんつらなれり

一六⑭世にふる道のけはしき習ひ也

一九⑩日数ふる旅のあはれは大井河 歌

三二⑬日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき

ぶ(武)《名》

三二⑬文にもくらく武にもかけて

ふうげつ(風月)《名》

一一②おほくの年の風月の遊びといふ

ふかし(深)《形》

一⑥川ふかく流れはげしくみゆ

二二⑦かたへの憤ふかくして

一⑧旅の空のうれへずるに催して哀かたゞふ
かし

一八⑤虫のうらみあはれふかし

二一⑩哀もふかし蔦のした道 歌

一③ふかき夜の月かげほのかなり

四⑥むかひの汀みどりふかき松のむら立

五⑭下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも

一五②言のはの深き情は軒端もる 歌

一六④弘誓のふかき事うみのごとしといへる
一六⑦深き験の有と聞にも 歌

一九⑪わたらぬ水も深き色かな 歌

二六⑤雲の波煙の浪いとふかきながめなり

二九①深きめくみを神にまかせて 歌

ふかふ(巫峡)《名》

一六⑪彼巫峡の水の流おもひよせられて

ふく(吹)《動四》

一⑥松ふく峯のあらしのみぞいとどはげしく

二〇②松の嵐に心してふけ 歌

ふく(更)《動下二》

九⑩有明の月かげふけて友なし千鳥ときとくと
づれ

一⑦夜ふくるままに身にしみて

七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば

ふじ(富士)《名》

二五①つもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり

ふしぎ(不思議)《名》

二六①北はふじの麓にて西東へはるくとながき沼
あり

ふじのたかね(富士高嶺)《名》

三二⑧末代にとりてはこれも不思議といひつべし

二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば

ふじのね(富士嶺)(《名》)

二五⑬ふしのねの風にたゞふ白雲を 國

二六⑭影ひたす沼の入えにふしのねの煙も雲も浮鳴

かはら 國

ふしぶし(節節)(《名》)

一⑭目にたつ所々心とまるふし／＼をかき置て

ふしみのさと(伏見里)(《名》)

一三③かの伏見の里ならねどもあれまくおしく覚ゆ

れ

ふじのやま(富士山)(《名》)

二五③今富士の山のあたりに宿をかる行客あり

ふじのやまのき(富士山記)(《名》)

二五⑩都良香が富士の山の記に書たり

ふしわぶ(臥佗)(《動上二》)

一び圍 二五⑥牙る夜に誰こゝにしもふしわひて 國

ふす(臥)(《動四》)

cf. よこほり――

ふせい(風情)(《名》)

七③此うへは風情もめぐらしがたければ

ふだ(札)(《名》)

二〇⑤道のほとりに札をたてたるをみれば

ふたつ(二)(《名》)

二〇⑩難行苦行の二の道ともにかれたりといへども

ふたひ(二日)(《名》)

ふたむらやま(二村山)(《名》)

一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて

一〇⑤玉くしけ二村山のほのくくと 國

ふたり(二人)(《名》)

二五⑩美女二人ありて山の頂にならび舞と

ふだんかう(不斷香)(《名》)

一六③不斷香の煙風にさそはれうちかほり

ふちせ(淵瀬)(《名》)

四⑩飛鳥の河の淵瀬にはかざらざりけめとおぼゆ

ぶつざう(仏像)(《名》)

三二①仏像をつくり堂舎を建たり

三二⑥天竺農旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ

ぶっしん(仏神)(《名》)

三〇⑬仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた

ぶっほふとうせん(仏法東漸)(《名》)

三二⑨仏法東漸の砌にあたりて

ふで(筆)(《名》)

七⑨月のかげに筆を染つゝ花落を出て三日

ふね(舟)(《名》)

三⑩漕行舟のあとのしら波

三⑫世中を漕行舟によそへつゝ 國

一六⑨秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば

一六⑩ふねなどもをのづからくつがへりて

—ども 二六⑭沖には舟ども行ちがひて
cf. こ—・つり—

ふはのせきや (不破関屋) (名)

七①こえはてぬれば不破の関屋なり

ふみ (文) (名)

三三⑩文にもくらく武にもかけて

ふみかよふ (踏通) (動四)

—ふ困 一八⑥踏かよふ峯の梯とたえして 國

ふみわく (踏分) (動下二)

—け困 一一⑫あまたふみわけたる道ありて

ふもと (麓) (名)

二五②昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり

二六①北はふじの麓にて西東へはるくとながき沼

あり

ふゆ (冬) (名)

二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり

二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて

三三⑭秋より冬にもなりぬ

ぶゆう (武勇) (名)

二二⑥武勇三略の名を得たりかたはらに人なくぞみ

えける

ふる (降) (動四)

—り困 二八①炎旱の天よりあめにはかにふりて

二九⑧雨俄にふりてみかさもとりあへぬほど也

ふる (旧) (動上二)

—り困 八⑧木立年ふりたる杜の木の問より

一四⑩軒ふりたるわらやのところくまばらなる

ふる (舐) (動下二)

—れ困 八⑩物にふれて神さびたる中にも

ふるさと (故郷) (名)

三⑧名のみ残れるしかのふる郷 國

九⑥古郷にかへらんとする期いまだいくばくなら

ず

九⑭古郷は目をへて遠くなるみかた 國

一五⑭もしこの本意をとげて古郷へむかはゞ

二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ

滝の音哉 國

三三⑩故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたる

こゝちす

三三⑫故郷へ帰る山ちのこからしに 國

ふるし (古) (形)

—き困 三⑤此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあ

はれなり

一三⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ

一四⑦わたせる橋を浜名となづくふるき名所也

二二④是も又ふるき^{わか}かとなりなば名だにも残らじ

ぶわう (武王) (名)

一一①もろこしの召公奭は周の武王の弟也

へ(辺)《名》

cf. みちの——

べいじゅう(陪従)《名》

三二②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらず

べうべうたり(眇眇)《形動》

—と題 一五⑤北南は眇々とはるかにして

へだたる(隔)《動四》

—り圍 一七⑤しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて

ほ

ほい(本意)《名》

一二⑬その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ

一五⑭もしこの本意をとげて古郷へむかはゞ

ほう(鳳)《名》

三二⑤鳳の臺日にかゞやき鹿の鐘霜にひゞき

ほうらい(蓬萊)《名》

二六⑧海の上にかびて蓬萊の三の嶋のごとく

ほうじゅうゑ(放生会)《名》

三二③職掌に仰て八月の放生会ををこなはる

ほか(外)《名》

七⑧二千里の外の古人の心遠く思ひやられて

一三⑤人の家居をさへ外にのみうつすなど

へ

二〇⑧其外にさらにみゆる物なし

二一④心を淨域の雲の外にすませる

三二⑫そのほか由比の浦と云所に阿弥陀仏の大仏を

つくり

cf. おもはぬ——おもはぬ——に

ほす(乾・干)《動四》

—す困 二四⑧ほすまもなき袖のしづくまでは

ほっしん(発心)《名》

二〇⑧発心のはじめを尋きげば

ほっしんす(発心)《動サ変》

—する困 一一④人の発心する道その縁一にあらねども

ほっせ(法施)《名》

二八⑫いのりて法施奉るついでに

ほど(程)《名》

一⑦柴の庵までもしばらく思ひやすらふ程なれば

一⑨かゝるほどにおもはぬ外に

二②住家を出て相坂の関うち過るほどに

三⑤此ほどはふるき皇居の跡ぞかし

三⑨せたの長橋うち渡すほどに

三⑭このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ

五⑬この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

六⑥余熱いまだつきざる程なれば

七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば

九⑪この宮をたち出浜路におもむくほど

cf. いく——

- 一〇②山中などをこえ過るほどに
- 一一②みやち山こえ過るほどに赤坂と云宿あり
- 一三④此みちをば昔よりよくなるかたなかりし程に
- 一三⑫山中にこえかゝるほどに
- 一五④此宿をもうち出て行過るほどに
- 一五⑨野原なればつくくとながめゆくほどに
- 一五⑫雨露もたまらず年月を送るほどに
- 一七④爰に宿かりて一日二日とゞまりたるほど
- 一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに
- 一九⑫岡部のいまづくをうち過るほどに
- 二〇④業平がす行者にことづてしけん程は
- 二〇④いづくなるらんと見行ほどに
- 二一⑭猶うちすぐるほどに
- 二二⑨都のかたへはせのほりけるほどに
- 二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり
- 二四⑦あら磯の岩のはざまを行過るほどに
- 二四⑬神原といふ宿のまへをうちとをるほどに
- 二八⑥この禰を立出て猶ゆきすぐるほどに
- 二九⑨みかさもとりあへぬほど也
- 二九⑨暮かゝるほどに下りつきぬれば
- 三〇③かくしつゝあかしくらすほどに
- 三二⑬掃べきほどとおもひしもむなしく過行て
- 三三⑧かゝるほどに神無月の廿日あまりの比

ほとけ(仏)《名》

二〇⑩仏を念するに性ものうし

三二④仏はすなはち兩三年の功すみやかに

ほとり(辺)《名》

一⑦都のほとりに住居つゝ

二②東山の辺なる住家を出て

二⑤此関の辺にわらやの床を結びて

五⑨かの遺愛寺の辺の草の庵のねざめもかくや有

けむ

二二⑩道のほとりの往還の陰までも思ひよりて

二〇⑤道のほとりに札をたてたるをみれば

ほのかなり(仄)《形動》

一なり 二④ふかき夜の月かげほのかなり

ほのほのと(仄仄)《副》

一〇⑤玉くしけ二村山のほのくと明行末は波路な

りけり 國

ほふもん(法文)《名》

二〇⑦浄土の法もんなどをかけり

ほふわう(法皇)《名》

cf. さぬきの——

ほむのがはら(本野原)《名》

一一⑨ほむの川原にうち出たれば

ほろほす(亡)《動四》

一す 二二⑧たちまちに身をほろほすべきにににければ

ほんしゃ (本社) (名)

三一③崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ

ほんぞん (本尊) (名)

三二⑤彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作

ほんたい (本躰) (名)

九①此宮の本躰は草薙と号し奉る神剣也

ま

ま (間) (名)

二四⑤さらにまどろむ間だになかりつる草の枕の

二四⑧ほすまもなき袖のしづくまでは

cf. この――

まうしおく (申置) (動四)

―き 一五⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍り

けり

まうす (申) (動四)

―す 九②日本武尊と申夷をたいらげて帰り給ふ時

一八⑬かの言のはものこらずと申ものあり

二二⑭しもさまのもの事は申にをよばねども

―せ 三〇⑩抑かまぐらのはじめを申せば故右大將家と聞

え給ふ

まうづ (詣) (動下二)

―で 二⑫東三条院石山に詣て還御ありけるに

まかす (任) (動下二)

―せ 二九①今よりは思ひ乱し蘆の海の深きめくみを神に

まかせて 團

まくら (枕) (名)

五⑧枕にちかきかねの声曉の空にをとづれて

cf. くさの――たび――

まこと (誠) (名)

一一⑤誠の道におもむきけんありがたくおぼゆ

まことに (誠) (副)

三⑩漕行舟のあとのしら波誠にはかなく心ぼそし

六⑤余り涼しきまですみわたたりて実に身にしむば

かりなり

まさかど (將門) (名)

二三⑦むかし朱雀天皇の御時將門と云もの東にて謀

反おこしたりけり

まさご (真砂) (名)

一五⑥白き真砂のみありて雪の積れるに似たり

まさる (増・優) (動四)

―り 二六①浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ

二七②眺望いづくにもまさりたり

―る 四⑬行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさる

のちの篠原

―れ 一六⑩此河みづまされる時ふねなどもをのづからく

つがへりて

二〇⑫里にありて勤たるにまされるよしある人のを

cf. あれ——なり——みなぎり——
しへにつきて

まして《副》

二三⑭ましてしもさまのものは申にをよばねども

また《又》《副・接》

三⑬世中を漕行舟によそへつゝなかめし跡を又そ

なかむる 國

九①又いはく此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

九⑥任限又みちたり

一二④あまねく又人の患をことほりおもき罪をもな

だめけり

一五⑧塩かぜ梢に音信又あやしの草の庵所々みゆる

二二⑫我も又こゝをせにせんうつ山分て色ある薦

のした露 國

二二⑬是も又ふるきつかとなりなば名だにも残らじ

とあはれ也

二八⑤せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神そ

この神 國

二八⑨箱根の湖となづく又蘆の海といふもあり

三二④堂は又十二楼のかまへ望むにたかし

まだ《未》《副》

一⑩都を出て東へ赴く事ありまだしらぬ道の空

まちつく《待付》《動下二》

―け國 二四⑬をくれたる者まちつけんとてある家に立入たるに

まちまちなり《区々》《形動》

―に圃 三二⑪松の社蓬の寺まちまちにこれおほし

まつ《松》《名》

四⑥みどりふかき松のむら立波の色もひとつにな

り

六⑭山風松の梢に時雨わたりて日影もみえぬ木の

下道

一四④其間に洲崎遠くさし出て松きびしく生つゞき

一四⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし

一五⑦其間に松たえくゝ生渡りて塩かぜ梢に音信

一七⑨浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残

をそきく 國

一八③北は深山にて松杉嵐はげしく

一九⑬かた山の松のかげに立よりて

二〇②是そこのたのむ木のもと岡へなる松の嵐に心

してふけ 國

二六⑦浦かぜ松の梢にむせぶ

二六⑭松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし

二七④見渡せは千本の松の末遠みもとりにつゞく波

のうへ哉 國

二七⑬松の嵐ぐらくをとづれて

三二⑪つくりそへられたる松の社蓬の寺まちまちに

これおほし

三三②松ふく峯のあらしのみぞいとらばげしくなり

まされる

まづ(先)《副》

一一⑭かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなり

り

まつたい(末代)《名》

三二⑧末代にとりてはこれも不思議といひつべし

まつばら(松原)《名》

cf. せんほんの——

まつりごと(政)《名》

一一②⑧ひとつの甘菜のもとをしめて政ををこなふ時

まど(窓)《名》

一九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ

まどろむ(微睡)《動四》

一む困 二四⑤さらにもどろむ間だになかりつる草の枕のま

ろぶしなれば

まなこ(眼)《名》

二六⑤すべて孤鳴の眼に遮るなし

まばらなり(疎)《形動》

一に困 四⑩家居もまばらに成行など聞こそ

一なる困 五⑥まばらなるこの秋かせ夜ふくるままに身に

しみて

一四⑫軒ふりたるわらやのところくまばらなるひ

まより

まひざはの原(舞沢原)《名》

一五④まひざはの原と云所に来にけり

まぶ(舞)《動四》

cf. ならび——

まへ(前)《名》

八①かやつ東宿の前を過れば

一三③豊河と云宿の前をうち過るに

二四⑬神原といふ宿のまへをうちとをるほどに

二九⑬前は道にむかひて門なし

おん——一五⑬此観音の御前にまいりたりけるが

一七⑪その御前をすぐとていさかおもひつらけら

れし

まへしまのしゆく(前嶋宿)《名》

一九⑫まへ嶋の宿をたちて岡部のいますくをうち過

るほど

まま(俣)《名》

一七⑭ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる

る神のしるしを

一九⑭夏のまゝなる旅ごろもうすき袂もさむくおほ

ゆ

ままに(俣・随)《連語》

五⑦夜ふくるままに身にしみて

八⑫暮行まゝにしつまり行声こゑも心すぐく聞ゆ

まよひ(迷)《名》
三二⑬日をふるまよにはたゞ都のみぞこひしき

一⑤あかね別をおしみしまよひの心をしもしるべ
とし

まよふ(迷)《動四》

一ひ囀 一①行末もまよひぬべきに

まるぶし(丸臥)《名》

二四⑤さらにまどろむ間だになかりつる草の枕のま

ろぶしなれば

まるらす(参)《補助下二》

一せ囀 二二⑫西行修行のついでにみまいらせて

まるる(参)《動四》

一り囀 八⑦やがてまいりておがみ奉るに

一五⑬此観音の御前にまいりたりけるが

一六②聞あへずその御堂へ参りたれば

三二⑬やがていざなひてまいりたれば

一る囀 一六②人多くまいるなんぞいふなる

まんげつ(満月)《名》

三二④白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞやか

す

まんぜいしゃみ(満誓沙弥)《名》

三⑩かの満誓沙彌が比叡山にて此海を望つゝよめ

りけん歌

み

み(身)《名》

一③彼白樂天の身は浮雲に似たり首は霜ににたり
と書給へる

一⑧是即身は朝市にありて心は隱遁にあるいはれ
なり

五①年へぬる身は老やしぬるといへるは 國

五⑦夜ふくるままに身にしみて

六⑤実(實)に身にしむばかりなり

二〇⑨わが身はもと此國のものなり

二〇⑩其身堪(堪)たるかたなければ

二一③身を孤山の嵐の底にやどして

二二⑧たちまちに身をほろぼすべきになりければ

二四①いそべによする波の音も身のうへにかゝるや
うにおぼえて

二八⑩うき身の行衛(衛)するべさせ給へなどのりて

三二⑬かずならぬ身なれば

三三①千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

み(御)《接頭》

cf. 一かぐら・一かさ・一こ・一しめ・一だう・一よ・おん

み《接尾》《形容詞語幹接統》

cf. とほし

みうち(三浦)《名》

三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば
みうらがさき (三浦崎) 《名》

三〇⑧玉よする三浦かさきの波まより 歌

みえわたる (見渡) 《動四》

一 する 四⑤南には池のおもて遠く見えわたる

みがく (磨) 《動四》

一 ぎ 三三③白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞやか

す

みかさ (笠) 《名》

二九⑧雨俄にふりてみかさもとりあへぬほど也

みかど (御門) 《名》

cf. みづのをの —

みかは (三河・参河) 《名》

一〇⑭もろともにゆかぬ三河の八はしを恋しとのみ

や思ひわたらん 歌

一三⑫参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり

みかはのくに (三河国) 《名》

一〇⑦ゆきくゝて三河国八橋のわたりをみれば

みきく (見聞) 《動四》

一 く 三二⑪かやうのことどもを見聞にも心とまらずしも

はなけれども

みきは (汀) 《名》

四⑤むかひの汀みどりふかき松のむら立

みぎり (砌) 《名》

一⑬或は海辺水流の幽なる砌にいたるごとに
九①景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へりと

いへり

二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに

三〇⑭仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりのかた

三二⑨仏法東漸の砌にあたりて

みくづ (水窟) 《名》

一六⑪底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ

みこ (御子) 《名》

九②景行の御子日本武尊と申

みこと (尊) 《名》

九③尊は白鳥となりて去給ふ

cf. すさのをの —

みさき (御崎) 《名》

三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば

みしまのだいみゃうじん (三嶋大明神) 《名》

二七⑭此社は伊予の国三嶋大明神をうつし奉ると聞

にも

みしまのやしる (三嶋社) 《名》

二七⑫三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに

みだう (御堂) 《名》

一五⑪御堂など朽あれにけるにや

一五⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍り

けり

一六①御堂を造げるより人多くまいるなんどぞいふなる

一六②聞あへずその御堂へ参りたれば

みだる(乱)《動下四》

―れ囲

八⑨木綿四手風にみだれたることがら

一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねども

cf. おもひ―

みち(道)《名》

一⑦人並に世にふる道になんつらなれり

一⑩まだしらぬ道の空山かきなり江かきなりて

六⑦すゑ遠き道なれども立さらん事は

一〇①古郷は日をへて遠くなるみかたたいそく汐干の道そくるしき 闕

一一④人の発心する道その縁一にあらねども

一一⑤誠の道におもむきけんありがたくおぼゆ

一一⑫あまたふみわけたる道ありて

一一⑫古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかれたる柳も

一一⑭かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなる

一二⑪道のはとりの往還の陰までも思ひよりて

一三③此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

一六⑭たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき

習ひ也

一八④谷より嶺にうつるみち雲に分入心地して

二〇⑤道のはとりに札をたてたるをみれば

二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに

二〇⑪難行苦行の二の道ともにかけたりといへども

二二①道のかたはらの土と成にけりと思ゆるにも

二八⑥かぎりある道なればこの砌をも立出て

二九⑬前は道にむかひて門なし

三三①三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

cf. いま―・このした―・した―・つたひ―

みちのへ(道辺)《名》

六⑧道のへに清水なかるゝ柳かけ 闕

六⑪道のへの木陰の清水むすふとてしはしすゝまぬ旅人そなき 闕

二三③あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも

名をとゝめけり 闕

みつ(溝)《動四》

―ち囲 九⑥吾願已にみちぬ

九⑥任限又みちたり

みづ(水)《名》

一六⑧秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば

一六⑩此河みづまされる時

一六⑪彼巫峡の水の流おもひよせられていと危き心

ちすれ

一九⑪日数ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深

き色かな 園

二六③山のみどり影を浸して空も水もひとつ也

cf. なはしる—

みづうみ(湖)《名》

三⑨湖はるかにあらはれて

一四⑥みづうみにわたせる橋を浜名となづく

一七④しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて

二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたへり

二八⑧箱根の湖となづく又蘆の海といふもあり

みっか(三日)《名》

七⑩花洛を出て三日株瀬川に宿して一宵

みづぐきのあと(水荃跡)《連語》

三三⑨其ころのうち水ぐきのあとにもかきながし

がたし

みつのしま(三嶋)《名》

二六⑧海の上にかびて蓬萊の三の嶋のごとくに有

けるによりて

みづのをみかど(水尾帝)《名》

三〇⑩水の尾の御門の九の世のはつえをたけき人に

うけたり

みとどむ(見留)《動下二》

—むる困二九⑩聞ゆる所々をも見とむるひまもなくてうち

過ぬること

みどり(緑)《名》

四⑤むかひの汀みどりふかき松のむら立

二六②山のみどり影を浸して空も水もひとつ也

二六④松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし

二七⑤見渡せば千本の松の末遠みとりにつく波

のうへ哉 園

二八②枯たる稲葉もたちまちに緑にかへりける

三一①松柏のみどりいよくしげく

みな(皆)《副》

一二⑫これを見む輩皆かの召公を忍びげん

みなぎりまさる(漲増)《動四》

—り園 二九③谷川みなぎりまさり岩瀬の波高くむせぶ

みなぎる(漲)《動四》

—り園 一六⑨秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば

みなびと(皆人)《名》

一〇⑧みな人かれいぬのうへになみだおとしける所

よ

みなみ(南)《名》

四⑤南には池のおもて遠く見えわたる

一四③南には潮海あり漁舟波にうかぶ

一七⑤南には極浦の波袖を湿し

一八③南は野山にて秋の花露しげし

二六④南は海のおもて遠くみわたされて

みなものよしたね(源義種)《名》

みね(嶺・峯)《名》
一〇⑬源義種が此国のかみにてくだりける時

- 一八③谷より嶺にうつるみち雲に分入心地して
- 一八⑥踏かよふ峯の梯とたえて雲にあとふ佐夜
の中山 歌

二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり

三三②松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしくなり
まされる

みののくに(美濃国)《名》

六⑬かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝ

りぬ

みめぐる(見廻)《動四》

一七④あまの小舟に棹さしつゝ浦の有さま見めぐれ

ば

みや(宮)《名》

八⑬此宮は素盞鳥尊なり

九①此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

九⑤大般若を書て此宮にて供養をとげける願文に

九⑪この宮をたち出浜路におもむくほど

cf. あつたの——おほつの——だいしの——をかもと
の——

みやこ(都)《名》

一⑦都のほとりに住居つゝ

一⑨都を出て東へ赴く事あり

四⑨都をたつ旅人この宿にこそとまりけるが
五⑦都にはいつしか引かへたるこゝちす

五⑪都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわ

ひぬ床の秋風 歌

二二⑨都のかたへはせのほりけるほどに

三〇①旅店の都にことなるさまかはりて心すごし

三二⑬日ふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき

三三④つくづくと都のかたをながめやる折しも

三三⑨とみの事ありて都へかへるべきになりぬ

三三⑭すでに鎌倉をたちて都へおもむくに

三四②なれぬれば都を急ぐ今朝なれと 歌

みやこうつり(都移)《名》

三④近江の志賀の郡に都うつりありて

みやこのよし(都良香)《名》

二五⑪都良香が富士の山の記に書たり

みやぢやま(宮路山)《名》

一一②みやぢ山こえ過るほどに赤坂と云宿あり

みやづくり(宮造)《名》

八⑬はじめは出雲国に宮造ありけり

みやま(深山)《名》

一⑥みやまのおくの柴の庵までもしばらく思ひや

すらふ程なれば

一八③北は深山にて松杉嵐はげしく

みやまおろし(深山嵐)《名》

みゆ(見) (動下二)

二九②太山おろしはげしくうちしぐれて

一え困

六⑭日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼそし

一五⑥錦花繡草のたぐひはいともみえず

二一②殊更煙たてたるよすがもみえず

一え困

一四⑬君どもあまたみえし中に

一五③言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色に

みえにき 歌

二一④いはねどしるくみえて中々あはれに心にくし

二二⑦かたはらに人なくぞみえける

一ゆ困

七⑦照月なみも数みゆばかりすみ渡れり

一〇④山路につゞきたるやうに見ゆ

一六⑧川ふかく流れはげしくみゆ

二五⑩絵の山よりもこよなうみゆ

二六①浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ

二六⑩いとゞおくゆかしくみゆ

二七①木のはのうけるやうにみゆ

三二⑦林池のありとにいたるまで殊に心とまりてみ

ゆ

一ゆる困

七②萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも

一〇⑩いねのみぞおほくみゆる

一五⑧又あやしの草の庵所々みゆる

二〇⑧其外にさらにみゆる物なし

二一⑨年経にけるとみゆるに歌どもあまた書付たる
中に

二二②道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも

みゆく(見行) (動四)

一く困 二〇④いづくなるらんと見行ほどに

みよ(御代) (名)

九①景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へり

みる(見) (動上一)

み困

五⑥たちよらてけふは過なん鏡山しらぬ翁のかけ

はみすとも 歌

七⑭しらさりき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月

をみるとは 歌

一二⑫これを見む輩皆かの召公を忍びけん

一七②此河のはやき流も世中の人の心のたくひとは

見す 歌

み困

五①鏡山いさたちよりてみてゆかむ 歌

八③かのみてのみや人にかたらんとよめる花のか

たみには

一九⑧中々わたりてみむよりもよそめおもしろくお

ほゆれば

二二⑫西行修行のついでにみまいらせて

みる困

一四⑭床の下に晴天をみると忍びやかにうち詠じた

りしこそ

みる困

一八②みるにいよく心ぼそし

みれ

- 二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに
- 二三①さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ
- 二五④ふしのねの風にたよふ白雲を天津乙女の袖
- かとそみる 〔圖〕
- 四④しの原と云所をみれば西東へ遥にながき堤あ

り

- 六④昔にきよしさが井を見れば
- 七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば
- 一〇⑦ゆきくして三河国八橋のわたりをみれば
- 一〇⑨そのあたりをみれどもかの草とおぼしき物は
- なくて

みわかる

- 二〇⑤道のほとりに札をたてたるをみれば
- 二四④障子に物をかきたるをみれば
- 二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば
- 三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば
- (見分) (未詳「見分く(四)」の誤写か)

みら困

- 三③いまだ夜のうちなればさだかにも見わからず

みわたす

(見渡) (動四)

- 一さ困 二六④南は海のおもて遠くみわたされて
- 一し困 一一⑩秦甸の一千余里を見わたしたらんこちして
- 一九⑥うちのぼるやうなる奥より大井川を見渡した
- れば
- 一せ困 二七④見渡せば千本の松の末遠みもとりにつゝく波
- のうへ哉 〔圖〕

みをつくし

(濤標) (名)

- 一六⑥たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有
- と聞にも 〔圖〕

みんぶきやう

(民部卿) (名)

- 二三⑦是をたひらげんために民部卿忠文をつかはし
- ける

- 二三⑨民部卿にともなひて軍監と云つかさにて行け
- るが

- 二三⑪民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり

む

むえん

(無縁) (名)

- 二〇⑤无缘の世すて人あるよしをかけり

むかし

(昔) (名)

- 二⑤むかし蟬丸といひける世捨人
- 三③昔天智天皇の御代大和国飛鳥の岡本の宮より
- 四④昔なゝの翁のよりあひつゝ
- 一三④此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に
- 一三⑧昔より住つきたる里人の今更るうかれんこそ
- 一八⑩昔は南陽県の菊水下流を汲で酔をのぶ
- 二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず
- 二〇⑭むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の厭をと
- り
- 二二⑬よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはな

にゝかはせん 國

二三⑥むかし朱雀天皇の御時

二五②昔香爐峯の麓に庵をしむる隱士あり

二六⑧此原昔は海の上にかうかびて

むかひ (向) (名)

四⑤むかひの汀みどりふかき松のむら立

一六⑨往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし

むかふ (向) (動四)

一は困 一五⑭古郷へむかはゞ御堂をつくるべきよし

一ひ困 二三⑭海に向ひたる家にとどりて侍れば

二九⑬前は道にむかひて門なし

むさでら (武佐寺) (名)

五⑥ゆき暮ぬればむさ寺と云山寺のあたりにとま

りぬ

むさしのぜんじ (武蔵前司) (名)

cf. こー

むし (虫) (名)

一八④虫のうらみあはれふかし

三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

三三②聞なれし虫の音もやよはりはてて

むすびつく (結着) (動下二)

一け困 一六④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば

むすぶ (結) (動四)

一ひ困 二⑥此関の辺にわらやの床を結びて

二〇⑬此山に庵を結つゝあまたの年月ををくるよし
をこたふ

むすぶ (搦) (動四)

一ぶ困 六⑩道のへの木陰の清水むすぶとしてしはすゝま

ぬ旅人そなき 國

むせぶ (咽) (動四)

一び困 二三⑥沖の石村々塩干にあらはれて波に咽ひ

一ぶ正 一四⑤嵐しきりにむせぶ

二六⑧浦かせ松の梢にむせぶ

二九③岩瀬の波高くむせぶ

むなし (空・虚) (形)

一しから困八③往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも

一しく困 七④爰をばむなくうち過ぬ

三二⑭掃べきほどとおもひしもむなく過行て

むねゆき (宗行) (名)

一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人

むほん (謀反) (名)

二三⑦将門と云もの東にて謀反おこしたりけり

むら (叢) (名)

cf. さぎー・すぎー

むらだち (群立) (名)

四⑥みどりふかき松のむら立

むらむら (斑斑) (副)

二三④沖の石村々塩干にあらはれて波に咽ひ

むる(群)《動下二》

―れれ團 二六③むれたる鳥おほくさはぎたり

cf. うち―

め

め(目)《名》

一四⑭目にたつ所々心とまるふしどくをかき置て

二一⑭めにたつさまなる塚あり

めい(命)《名》

二七⑭能因入道伊予守実綱が命によりて歌よみて奉

りけるに

めいしよ(名所)《名》

一四⑦ふるき名所也

一八②名高き名所なりとは聞きたれども

めうつり(目移)《名》

一七⑦昨日のめうつりなからずは

めくみ(患)《名》

二九①今よりは思ひ乱し蘆の海の深きめくみを神に

まかせて 國

めぐらしがたし(廻難)《形》

―けれ團 七③此うへは風情もめぐらしがたければ

めぐる(廻)《動四》

cf. み―

めし(召)《名》

三〇⑬將軍のめしをえたり

も

もくさう(木像)《名》

一五⑩此原に木像の観音おはします

三二⑧金銅木像のかはりめこそあれども

もし(若)《副》

一五⑬もしこの本意をとげて古郷へむかはゞ

もちつき(望月)《名》

二③駒引わたる望月の比も漸近き空なれば

もと(許・元・本・下)《名》

一〇⑬とまりける女のもとにつかはしける歌に

一二②ひとつの甘菜のもとをしめて政ををこなふ時

一二④そのもとをうしなはず

一四⑭夜もすがら床の下に晴天をみると

二〇①是そこのたのむ木のもと岡へなる松の嵐に心

してふけ 國

二〇⑨わが身はもと此国のものなり

二九⑭行人征馬すだれのもとにゆきちがひ

三二⑭本は遠江の国の人定光上人といふものあり

もとむ(求)《動下二》

―む田 一⑤たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ

もとゆひ(元結)《名》

六②かはらしな我もとゆひに置霜も名にしおいそ

の杜の下草 國

もとより(元)《副》

一④もとより金帳七葉のさかへをこのます

三三⑩錦をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらね

ども

もとゐ(基)《名》

二八⑨権現垂跡のもとゐけだかくたふとし

もなか(最中)《名》

七⑦秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて

もの(物・者)《名》

八⑩物にふれて神さびたる中にも

一〇⑨かの草とおぼしき物はなくて

一二⑩人をはぐくみ物を憐むあまり

一三③ある者のいふをきけば

一六④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば

一八⑬かの言のはものこらずと申ものあり

一九⑦すながしといふ物をしたるにたり

二〇⑧其外にさらにみゆる物なし

二〇⑨わが身はもと此国のものなり

二二⑭ましてしもさまのものの事は申にをよばねど

も

二三⑦将門と云もの東にて謀反おこしたりけり

二三⑨清原滋藤といふ者民部卿にともなひて

二四⑬をくれたる者まちつけんとてある家に立入た

るに

二四⑭障子に物をかきたるをみれば

二七⑦網つりなどいとなむ賤しきものすみかにや

三一⑭本は遠江の国の人定光上人といふものあり

ものうし(物憂)《形》

一〇⑩立さらん事はものうくて更にいそがれず

一〇⑩仏を念するに性ものうし

ものがたり(物語)《名》

cf. げんじ——

ものがなし(物悲)《形》

一〇⑩思ひつゞけられていたう物がなし

もみち(紅葉)《名》

一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねど

も

ももとせ(百年)《名》

一①齡は百とせの半に近づきて

もよほす(催)《動四》

一〇⑩懐古のころに催されて

九⑨旅の空のうれへすゞるに催して

一八④鹿の音なみだをもよほし

三〇⑤海上の眺望哀を催して

一〇⑩源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをとかな

といへる

もり(森)《名》

八⑧木立年ふりたる杜の木の間に夕日のかけた
えだえさし入て

cf. おいその――

もる(漏)《動四》

―る困 一五②言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色に

みえにき 國

もろこし(唐土)《名》

一一⑭もろこしの召公奭は周の武王の弟也

もろこしがはら《名》

二九⑨大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々をも見

とむむるひまもなくて

もろともに(諸共)《副》

一〇⑭もろともにゆかぬ三河の八はしを恋しとのみ

や思ひわたらん 國

もろもろ(諸諸)《名》

一二③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたる

まで

や

やう(様)《名》

八④かたみにはやうかはりておぼゆ

やうたいふ(羊太傅)《名》

二二④羊太傅が跡にはあらねども

やうやう(漸)《副》

二③望月の比も漸近き空なれば
一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれ

り

やうやく(漸)《副》

一①髪は霜漸冷しといへども

やがて(躰)《副》

八⑦やがてまいりておがみ奉るに

一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて

二六⑬やがて此原につきて

三一⑬やがていざなひてまいりたれば

やく(焼)《動四》

―き困 二三⑩火のかけは寒くして浪を焼

やく(焼)《動下二》

―け困 一八⑬火のためにやけてかの言のはものこらずと申

やくもたつ(八雲立)《連語》

八⑭八雲たつといへる大和言葉も

やしろ(社)《名》

一七⑩ことのまゝと聞ゆる社おはします

二七⑬此社は伊予の国三嶋大明神をうつし奉ると聞

にも

cf. みしまの――

やすらふ(休)《動四》

―は困 一九⑨菟田川ならねどもしばしやすらはる

一八回 二三④過うくてしばしやすらへば

cf. おもひ——

やつはし(八橋)《名》

一〇⑦三河国八橋のわたりをみれば

一〇⑭八はしを恋しとのみや思ひわたらん 歌

やど(宿)《名》

五②宿もからまほしく覚えけれども

一四⑪一夜とまりたりしやどあり

一七③爰に宿かりて一日二日とどまりたるほど

二五④富士の山のあたりに宿をかる行客あり

三三⑭都へおもむくに宿の障子に書付

三四③さすかなこりのおしき宿哉 歌

cf. しゅく

やどす(宿)《動四》

一し回 七⑩株瀬川に宿して一宵

二二③身を孤山の嵐の底にやどして

cf. しゅくす

やどり(宿)《名》

二七⑦夜のやどりありかことにして

やどる(宿)《動四》

一り回 二三⑭海に向ひたる家にやどりて侍れば

二七⑥或家にやどりたれば

やなぎ(柳)《名》

一一⑬柳もいまだ陰とたのむまでではなければ

やなぎかけ(柳蔭)《名》

一二⑪思ひよりに植をかれたる柳なれば

六⑨清水なかるゝ柳かけしばしとてこそたちとま

りつれ 歌

やなぎはら(柳原)《名》

一三①植置しぬしなき跡の柳はら 歌

やはぎ(矢矧)《名》

一一②やはぎといふ所をいでて

やま(山)《名》

一⑩山かさなり江かさなりて

五②此山の事にやとおぼえて

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし

一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに

二〇⑫山の中に眠れるは

二〇⑬此山に庵を結つゝあまたの年月ををくるよし

二三⑩駅路の鈴の声はよる山をすぐ

二五④衣をかたしきて山の雪をおもへる

二五⑨絵の山よりもこよなうみゆ

二五⑩白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞

二六②山のみどり影を浸して

二八⑧山のなかにいたりて

二九②此山もこえおりに湯本と云所にとまりたれば

二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ

cf. いし——うつの——かがみ——かた——せき

——たかしの——はこねの——ひがし——ふじ
の——ふたむら——みやぢ——

やまかせ(山風)《名》

六⑭山風松の梢に時雨わたりて

やまぢ(山路)《名》

一〇④山路につどきたるやうに見ゆ

三三⑫故郷へ帰る山ちのこからしに 歌

やまでら(山寺)《名》

五⑥むき寺と云山寺のあたりに

やまとつた(大和歌)《名》

二⑥大和歌を詠じておもひを述けり

やまとことは(大和言葉)《名》

八⑭八雲たつといへる大和言葉も

やまとたけるのみこと(日本武尊)《名》

九②景行の御子日本武尊と申

やまとのくに(大和国)《名》

三③大和国飛鳥の岡本の宮より

やまへ(山辺)《名》

二一⑦かゝる山辺の住居ならては 歌

やち(稍)《副》

三三⑫聞なれし虫の音もやゝよりはりはてて

やる(遣)《動四》

cf. おもひ——ながめ——

ゆ

ゆかし(床)《形》

——しく圍一一⑩月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

ゆき(雪)《名》

八⑩梢にきゐるさま雪のつもれるやうに見えて

一五⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり

二五③簾をあげて峯の雪を望けり

二五④衣をかたしきて山の雪をおもへる

二五⑦高ねの雪を思ひやりけん 歌

二五⑧時わかぬゆきなれども

cf. しら——

ゆきあふ(行合)《動四》

——ふ圍 二⑬あまたゝびゆきあふ坂の関水にけふをかぎり
の影ぞかなしき 歌

ゆきくる(行暮)《動下二》

——れ圍 五⑥ゆき暮ぬればむき寺と云山寺のあたりに

ゆきすぐ(行過)《動上二》

——ぎ圍 三⑭このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ

——ぐる圍 一五④此宿をもうち出て行過るほどに

二四⑦あら磯の岩のはさまを行過るほどに

二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに

ゆきちがふ(行違)《動四》

——ひ圍 二六⑭沖には舟ども行ちがひて

二九⑩行人征馬すだれのもとにゆきちがひ

ゆきつく (行着) (動四)

一き圃 一四②橋本と云所に行つきぬれば

ゆきとまる (行泊) (動四)

一る圃 一四⑨行とまる旅ねはいつもかはらねと 歌

ゆきゆく (行行) (動四)

一き圃 一〇⑦ゆきく三河国八橋のわたりをみれば

ゆく (行) (動四)

一か圃 五①鏡山いさたちよりてみてゆかむ 歌

一〇⑭もろともにゆかぬ三河の八はしを 歌

一き圃 二④遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひいでらる

二三⑨軍監と云つかさにて行けるが

三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば

一く圃 四⑩行人もとまらぬ里となりしより 歌

一四⑥行人心をいたましめ

二三⑫清見かた関とはしらで行人も 歌

二四⑫浪わけ衣ぬれくそ行 歌

af. あけ・かはり・きえ・くれ・こぎ

・しづまり・すぎ・ながめ・なり・み

——ゆき——

ゆくすゑ (行末) (名)

五⑨行末とをきたびの空

五⑭朝つゆの霜にかはらん行すゑも

一一⑫行末もまよひぬべきに

一二⑬行すゑのかげとたのまむこと

ゆくへ (行方) (名)

二八⑫うき身の行衛しるべさせ給へ

ゆひのうら (由比浦) (名)

三一⑫由比の浦と云所に阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよし

ゆふしで (木綿四手) (名)

八⑨木綿四手風にみだれたることがら

ゆふだすき (木綿襪) (枕詞)

一七⑫ゆふたすきかけてそ頼む今思ふ 歌

二八⑬ゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆる

ゆふつかた (夕方) (名)

二九⑧鎌倉につく日の夕つかた雨俄にふりて

ゆふつけどり (木綿付鳥) (名)

二④木綿付鳥かすかにをとづれて

ゆふひ (夕日) (名)

八⑧夕日のかげたえだえさし入て

ゆめ (夢) (名)

一四⑥とまるたくひ夢をさまさずといふ事なし

ゆめち (夢路) (名)

二九⑦夢路ゆるさぬ滝の音哉 歌

ゆもと (湯本) (名)

二九②此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれば

ゆるす(許)《動四》

一 さ困 二 九 夢路ゆるさぬ滝の音哉 歌

ゆ糸(故)《名》

二 延喜第四の宮にておはしけるゆへに

一 〇 花ゆへにおちし涙のかたみとや 歌

一 二 三 ありける女ゆへに大江定基が家を出け

るも

一 二 五 国民挙りて其徳政を忍ぶ故に

一 三 七 かななるゆへならんとおぼつかなし

二 五 かななるゆへにかとおぼつかなし

よ

よ(世)《名》

一 七 人並に世にふる道になんつらなれり

四 一 かなはりゆく世のならひ飛鳥の河の淵瀬にはか

ぎらざりけめ

一 六 世にふる道のけはしき習ひ也

一 八 かななき世のならひいとあはれにかなしけ

れ

二 一 世をいとふ心のおくや濁らまし 歌

cf. このつの一

よ(夜)《名》

二 三 ぶかき夜の月かげほのかなり

五 七 夜ふくるままに身にしみて

七 六 夜更るほどに川端に立出てみれば

一 一 月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

二 五 牙る夜に誰こゝにしもふしわひて 歌

cf. ひとよる

よ(代)《名》

み 三 昔天智天皇の御代

よく(避)《動下二》

一 くる 一 三 四 此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

よこほりふす(横臥)《動四》

一 せ 一 八 古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば

よし(由)《名》

一 五 御堂をつくるべきよし心のうちに申置て

二 〇 無縁の世すて人あるよしをかけり

二 〇 里にありて勤たるにまされるよし

二 〇 あまたの年月ををくるよしをこたふ

三 一 大仏をつくり奉るよしかたる人あり

よしや(縦)《副》

二 二 よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはな

に、かはせん 歌

よす(寄)《動下二》

一 する 二 四 一 一 こそべによする波の音も

cf. うちよもひたま

よすが(縁)《名》

二 一 殊更煙たてたるよすがもみえず

三二⑫すみはつべきよすがもなきかずならぬ身

よすてびと (世捨人) (《名》)

二⑤むかし蟬丸といひける世捨人

二〇⑤無縁の世すて人あるよしをかけり

よそふ (寄) (《動下二》)

一八⑧ 三⑫世中を漕行舟によそへつゝ 歌

よそほひ (粧) (《名》)

よそめ (外目) (《名》)

よねつ (余熱) (《名》)

よのなか (世中) (《名》)

よは (夜半) (《名》)

よはひ (齢) (《名》)

よむ (詠) (《動四》)

一ま困

一八⑩南陽県の菊水 downstream を汲で齢をのぶ

一四⑬ 二⑬関の清水を過ぎせ給ふとてよませ給ひける御

歌

一四⑬ 二⑬関の清水を過ぎせ給ふとてよませ給ひける御

歌

歌

歌

歌

歌

歌

一み圃

七②荒にしのちはたゝ秋の風とよませ給へる歌

一八①古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば

五①老をいとひてよみける歌の中に

一〇⑧在原業平かきつばたの歌よみたりけるに

二八①能因入道伊予守実綱が命によりて歌よみて奉

りけるに

一〇⑩此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて

六⑨しはしとてこそたちとまりつれとよめるも

八④みてのみや人にかたらんとよめる花のかたみ

には

一一①恋しとのみや思ひわたらんとよめりけるこそ

二一⑩哀もふかし蕩のした道とよめる心とまりて

二二⑭かゝらむのちはなになゝかはせんとよめりける

など

よも (四方) (《名》)

よもぎ (蓬) (《名》)

よもすがら (終夜) (《副》)

一四⑬夜もすがら床の下に晴天をみると

二四②夜もすがらいねられず

よりあふ (寄合) (《動四》)

一ひ圃 四⑭昔なゝの翁のよりあひつゝ老をいとひて

よる (夜) (《名》)

一〇或は山館野亭の夜のとまり

三二②いまだ夜のうちなればさだかにも

一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて

二三⑩駅路の鈴の聲はよる山をすぐと云

二五④さゆる夜衣をかたしきて山の雪を

二七⑦夜のやどりありかことにして

cf. よ

よる(寄・依)(動四)

一り囀 一六①鎌倉にて望むことかなひけるによりて

二六⑨蓬萊の三の鳴のごとく有けるによりて

二八④実綱が命によりて歌よみて奉りけるに

一れ囀 二五⑨天によれるすがた絵の山よりもこよなうみゆ

cf. おもひ——たち——

よるのまき(夜聞)(連語)

二九④暢臥房のよるのまきにもすぎたり

よるこび(喜)(名)

三三⑩故郷にかへるよるこびは朱買臣にあひにたる

こゝちす

よわりはつ(弱果)(動下二)

一て囀 三三②聞なれし虫の音もやゝよわりはてて

り

りさんきう(驢山宮)(名)

二八⑩唐家驢山宮かとおどろかれ

りゃうさんねん(両三年)(名)

三二④両三年の功すみやかになり

りよてん(旅店)(名)

三〇①旅店の都にことなるさまかはりて

りりよう(李陵)(名)

三三①李陵が胡にいりし三千里のみち

りんち(林池)(名)

三一⑥林池のありとにいたるまで殊に心とまりてみ

ゆ

る・る

るしゃなぶつ(盧舎那仏)(名)

三二⑥金銅十丈余の盧舎那仏なり

ろうざん(隴山)(名)

三〇⑩恩賞しきりに隴山の跡をつぎて

ろうだい(楼台)(名)

三一⑥楼台の莊嚴よりはじめて

わ

わうくわん(往還)(名)

六⑥往還の旅人多く立よりて

八③往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも

一二⑩道のほとりの往還の陰までも

一六⑨往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし

わが(我)(連語)

六②かはらしな我もとゆひに置籍も 國

九⑥吾願已にみちぬ

二〇⑨わが身はもと此国のものなり

わかえ(和賀江)(名)

三〇③和賀江のつき嶋三浦のみさきなどいふ浦々

わかみや(若宮)(名)

三一①中にも鶴岡の若宮は松柏のみどりいよくし

げく

わかる(分・別)(動下二)

一れ園 三三①蘇武が漢を別し十九年の旅の愁

cf. ながれ

わかれ(別)(名)

一一④あかぬ別をおししまよひの心

わかれぢ(別路)(名)

一一⑦別路に茂りもはてゝ葛のはの 國

わきて(別)(副)

一四⑩わきて浜名の橋を過うき 國

二二⑬分て色ある薦のした露 國

わく(分)(動四)

一か園 二五⑧ふじの高ねを見れば時わかぬゆきなれども

わく(分)(動下二)

一け園 一⑪雲をしのぎ霧を分つゝ

cf. ふみ

わけいる(分入)(動四)

一る園 一八④谷より横にうつるみち雲に分入心地して

わする(忘)(動下二)

一れ園 一⑭わすれず忍ぶ人もあらば

一れ園 六⑦秋風にかくて暫忘れぬればすゑ遠き道なれども

一るる園 二⑧たとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝことなかれ

わたうづ(渡津)(名)

一三④わたふ津の今道と云かたに旅人おほくかゝる

間

わたす(渡)(動四)

一せ園 一四⑦みづうみにわたせる橋を浜名となづく

cf. うち

わたり(渡)(名)

一六⑧天竜と名付たるわたりあり

わたり(辺)(名)

一〇⑦三河国八橋のわたりをみれば

わたりそむ(渡初)(動下二)

二三⑥東路のおもひでもとなりぬべきわたり也

一め園 一三⑪いかなる人のわたりそめけん 國

わたる(渡)(動四)

一ら園 一九⑪わたらぬ水も深き色かな 國

一り園 一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり

一九⑧中々わたりてみむよりもよそめおもしろく

cf. あらはれ——うち——おとづれ——おひ——おもひ——かみさび——きき——しぐれ——すみ

——たち——ひき——ひびき——みえ——

わづかなり(僅)(形動)

——に囲 二六⑤わづかに遠帆の空にすらなれるを

——なる囲二〇⑥わづかなる草の庵のうちに独の僧あり

わぶ(佗)(動上二)

——び囲 二⑦風のかせはげしきをわびつゝぞすぐしける

cf. かたしき——ふし——

わらび(蕨)(名)

二〇④叔齋が首陽の雲に入りて猶三春の蕨をとり

わらや(藁屋)(名)

二⑥此関の辺にわらやの床を結びて

二⑩いにしへのわらやの床のあたり迄 國

一四④軒ふりたるわらやのところどく

われ(我)(名)

二一⑫我も又こゝをせにせんうつつ山 國

ゐ

ゐあいじ(遺愛寺)(名)

五⑧かの遺愛寺の辺の草の庵のねざめも

ゐうかる(居浮)(動下二)

——れ困一三⑧昔より住つきたる里人の今更ゐうかれんこそ

ゐる(居)(動上二)

cf. き——

系

系(絵)(名)

二五⑨絵の山よりもこよなうみゆ

系んじやう(遠情)(名)

七⑩かつく遠情を先途千里の雲にをくる

系んばん(遠帆)(名)

二六⑤わづかに遠帆の空にすらなれるを

を

をか(岡)(名)

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし

をかべ(岡部)(名)

一九⑫岡部のいまづくをうち過るほど

をかむ(拜)(動四) 二〇①是そこのたのむ木のもと岡へなる 國

——み囲 八⑧やがてまいりておがみ奉るに

cf. うち——

をかもとのみや(岡本宮)(名)

三④大和国飛鳥の岡本の宮より

をさむ(治)(動下二)

——め囲一二②陝のにしのかたを治し時

をし(鴛鴦)(名)

をし(惜)《形》
四⑥をしかものうちむれてとびちがふさま

—しく囀一三⑨かの伏見の里ならねどもあれまくおしく覚ゆ
れ

—しき囀三四③さすかなこりのおしき宿哉 鬨
をしへ(教)《名》

二〇⑩ある人のをしへにつきて

をしむ(惜)《動四》

—み囀 一①⑤あかぬ別をおししまよひの心をしもしるべ

とし

一二⑫国の民のごとくにおしみそだてて

をとめ(乙女)《名》

cf. あまつ—

をはりのくに(尾張国)《名》

八⑦尾張国熱田の宮にいたりぬ

をぶね(小舟)《名》

cf. あしかり—

をり(折)《名》

一四⑬月のかげ曇なくさし入たる折しも

三三④つくづくと都のかたをながめやる折しも

をる(折)《動四》

—り囀 二②柴折くぶるなぐさめまでも思ひたえたるさす

なり

をんな(女)《名》

一〇⑭とまりける女のもとにつかはしける歌に
一一③こゝにありける女ゆへに